

統の決断は、ヒトラーを新たな焦煤に導いた。英国政府と折り合いがつかなければ、ヒトラーには二つの選択肢しか残されていない。イギリスを軍事的に破るか、ソ連を敗北させて大陸におけるドイツの優位をイギリスに認めさせるか、である。そしてソ連の粉砕は、アメリカを最終的に参戦させないよう迅速な作戦で行わなければならない。

ヒトラーはイギリスの戦時内閣が五月の最後の週に重大審議を行ったことを知らなかった。フランス降伏後の七月十九日、国会で行った、最終的ではあるが曖昧な、かれの「和平呼びかけ」演説が英国政府によってただちに拒絶されたことで、気づかされたのである。イギリスが戦争終結のいかなる交渉をも断固として受け入れないことが明白となった。ダンケルクから無事に将兵を撤退させたあと、ロンドンとワシントンでは米国援助をどう具体化していくかの検討が始まっていた。ヒトラーも重大決意を迫られることとなった。それはそう遠いものではなかった。

第2章

ベルリン、一九四〇年夏、秋 ヒトラー、ソ連攻撃を決断

総統はどうしても和平交渉に乗ってこないイギリスの出方に困惑しきっていた。

かれはイギリスがロシアを頼りにしているからだ、と見た(われわれも同じ)。

そこで和平を強要させる奥の手をつかうことにしたのだ。

一九四〇年七月十三日付、ドイツ陸軍参謀総長フランツ・ハルダーの日記

「ロシアを壊滅させればイギリスの最後の望みは断たれる。ドイツはヨーロッパとバルカン半島の支配者になれる。決定——ロシア打倒がこの戦争の一部となる。一九四一年春……一九四一年五月に開始すれば五ヶ月ですべてが終わる」。一九四〇年七月三十一日、アルプスの山深いベルヒテスガールデンの山荘、ベルクホーフで開催した会議で、ヒトラーはこの驚くべき言葉を將軍たちに述べた。それは第二次大戦でかれの取ったもっとも運命的な選択だった。それは史上最大の流血を招いた戦争、ソ連とドイツの市民三〇〇〇万の命を犠牲にする東欧の一大闘争、前例のない広大な地域の荒廃をもたらした。それは約四年間続き、ベルリンの防空壕でのドイツ独裁者の自殺、そしてその後四五年続く欧州の半分におけるソ連の支配につながった。

その後起こったことと照らし合わせると、ヒトラー提案の重みにはまことに言語に絶するものがある。ナポレオンも一度同じことを試みた。一八一二年の戦役は、グラント・アルメー(大陸軍)と

ナポレオン自身の帝国の夢想を打ち砕くものとなった。ヒトラーの場合、賭けの結果はより破局的に終わった。その決断はかれ自身と国家の自殺願望のあらわれのようにも思える。ではなぜ、そうしたのか？ フランスに対する完璧な勝利により形成され、増幅された無敗神話による純粹な妄想だったのだろうか？ それは、ユダヤ的ポリテイズム、破壊という非理性的狂気、不合理なイデオロギイの論理的帰結だったのだろうか？ その決断が狂気の沙汰だったとすれば、なぜ軍指導者たちはそれにしたがったのか？ 独裁者が企んだ考えを部下におしつけ、みなが不承不承それを受け入れた、という単純な例にすぎないのか？ あらかじめ封じられた、ほかの選択肢もあつたのだろうか？ この決断の背後には、それ以外の選択を許さぬ戦略上の至上命題とでもいふべきものがあつたのだろうか？

ヒトラーの戦争への道については無数の研究がなされている。しかし、前述の設問に答える前に、ソ連攻撃決定にいたる前史にいささか触れてみることにする。

一九四一年六月に初めてドイツ軍がロシア領に侵入、ないし東欧攻略に向かったわけではない。第一次大戦中、すでに同じことが行われていた。一九一五年後半には、ドイツはロシア統治下のポーランドの一部、およびバルト海沿岸の広汎な地域を占拠していた。二年後、ドイツはさらに奥深く、ベラルーシとウクライナに進出した。一九一八年三月三日、ポリシェヴィキ新政権に押しつけられた苛酷なブレストリトフスク条約は、ポーランド、フィンランド、ラトヴィア、リトアニア、エストニア、ベラルーシ、ウクライナをドイツの影響下に譲った。ヒトラーはこの条約を、ドイツ民族生存に必要

な「領土と農地」を供給するものとして賞賛した。その何年かのち、ヒトラーがドイツの軍事指導者たちに説明したソ連侵攻の軍事目的——ウクライナ、バルト海、フィンランド、白ロシア（ベラルーシ）に緩衝国を設ける——は、ブレストリトフスク条約の条件に酷似していた。

一九一八年に占領したロシアについて形成されたドイツ人のイメージはのちまでも影響をおよぼし、一世代のち、第二の、はるかに暴虐な占領につながるメンタリティをつくることになった。「ロシアの深部には中欧の文化のかけらもない」と、第一次大戦に参加したある将校が記している。「そこはアジアであり、ステップ、沼、閉ざされた地獄、神に見棄てられた土地である」。占領軍はこういった印象から、ドイツ軍国主義の秩序と文化を具現する国家造りをバルト地域に求めることとした。この軍国的理想国家造りに主役をつとめたのは、戦争の後半、もっとも精力的に活躍した国家指導者の一人、エーリヒ・ルーデンドルフ将軍である。一九二〇年代の初めころ、ルーデンドルフはヒトラーと密接な関係を持ち、一九二三年十一月のピアホール一揆の失敗に加担していた。

一九二〇年代の初めころ、ルーデンドルフがロシアに関する見方についてヒトラーに影響力を与えた一人であつたことに間違いはなさそうだ。初期の海外政策についての月並みな汎ゲルマン思想——ドイツの一九一四年の国境の回復、植民地の取り戻し、厭うべきヴェルサイユ条約の責任者、フランスとイギリスに対する最終的報復を主要項目として含むもの——は、徐々にロシアを犠牲とする東方への領土拡張に変わっていった。その場合、英国との関係は親善が基本となる。ヒトラーのこの考え方は、一九二二年十二月の宣言に最初に見られる。ヒトラーは言う。「イギリスの助力によるロシアの覆滅が企図されなければならない。ロシアはドイツ住民に充分な土地を、そしてドイツ産業に広汎な活動分野を提供することとなる」。一九二四年までにこの原則はヒトラーの胸にしっかりと根づいていた。そして、一九二六年に出版された論稿、『我が闘争』第二巻の終わりに、「われわれ国家社

会主義者は、戦前における外交政策と異なる一線を意識的に画する、われわれは六〇〇年以前の立ち位置から出発する。われわれはドイツ民族の終わりのない南方、西方への移動を停止し、目を東方の土地に向ける。……今日、われわれがヨーロッパの土地問題を語るべき、基本的に心におくのは唯一、ロシアとその国境周辺の従属国のみである」と明確に記述した。この「生存圏」(レーベンスラウム)の原則はいったん確立されるや、いっさい変更されることなく、ベルリンの防空壕にいたるまで、ヒトラーの「世界観」にとって決定的になった。

これは別に独創的な思想ではなかった。実際これは一八九八年以降の国家主義者や帝国主義者に共通する考え方であり、後年、ヒトラーの個人秘書となるルドルフ・ヘスを教えたミュンヘンの大学教授、カール・ハウスホーファーに代表される地政学の理論家たちによって知的なよそおいをかぶせられた。この思想は複雑な経済学をもとにしていた。列強の一国としての強さと活力維持に必要な人口増加は、領土の拡張のみにその源泉が求められる。その点ドイツの領土は必要な人口増加を許すには、あまりに限られている。したがって、ドイツは新しい領土を必要とする。ヒトラーが羨美かつ羨望してやまない英帝国は、海外征服と植民地経営によって得た領土がその力の源泉となっているが、ドイツ帝国のそれはもとと本国に近いところ、東ヨーロッパに存らねばならない。

どんな国、地域、国民でも、その土地を明け渡すはずはないので、レーベンスラウム思想に基づく土地の奪取は戦争となる。そういう思想は単純な帝国主義の思想のみならず、暗黙のうちには社会的ダーウイン主義、人種差別主義の考えに影響されている。すなわち強者は生存権が与えられ、弱者は消えなければならぬ、活力に満ちた創造的な民族は、劣等民族に対して勝利して当然である、と。ヒトラーはそれに独自の重要な民族問題の要素を加えた——反ユダヤ主義である。ここでも、ヒトラーの反ユダヤ主義は、いかに邪悪なものだったとしても、かれ固有のものではなかった。ヒトラーの反

ユダヤの偏執狂ぶりは異常ではあったが、多くの説を取り入れたものだった。しかし、かれの病理学的反ユダヤ主義を生、存、圏と組み合わせた点に、かれの独創性がある。——ヒトラーの一個の世界観は二つの要素で構成されていたのである。一九二〇年までにヒトラーは、ポリシェヴィズムはユダヤ人の産物である、と説いていた。多分この見方は、仲間の宣伝担当者、バルト海沿岸出身のアルフレート・ローゼンベルクおよびドイツの右翼新聞界に巣食うロシアからの亡命者の猛烈な反ユダヤ、反ポリシェヴィキの言説に影響を受けたものと思われる。前述したドイツ東方の土地に対する渴望は、それその土地におけるユダヤ支配の駆逐と直接結びついた。「教世紀にわたり」とヒトラーは書いた、「ロシアはその指導層のゲルマン的中核から養分を吸収してきた。今日、それはまるまる廃絶され、消滅した。それはユダヤ人に置き換えられてしまった。……ユダヤ人は組織能力がまったくなく、解体への発酵体だ。東方の巨大帝国はいまや崩壊せんとしている。ロシアのユダヤ支配の終焉は、ロシア国家の終焉そのものである」。ロシアにおける「生存圏」確立とは、言い換えれば、ロシアのユダヤ支配の打倒と同義語なのである。

一九二〇年代の数え切れない演説でヒトラーは「生存圏」に触れた。一九二八年の出版されなかった小冊子で、かれは『我が闘争』の記述よりも、ずっと長々とその外交政策を論じた。かれはそこで外交政策を、「人々に必要なレーベンスラウムを質、量において確保する技術」と定義づけた。ドイツにとって、その目標はただ一つ。「唯一の可能性——それは東方の空間」だった。一九二八年当時、それはまだ風変わりな所説にとどまっていた。こういう考えをもてあそぶものは少数だったし、かれら自身、あまり本気にはしていなかった。ヒトラーは政治的停滞状況にあって泡沫政党の代表でしかなかった。最新の国会選挙では三パーセント以下の支持しか獲得できていなかった。政治権力を手に入れられる見通しはまったく立たなかった。政治の主流はヒトラーの考えとはまったく異なる動きを

していた。ブスマフ・シュトラーゼマンの率いる外務省は、そのロカルノ条約と国際連盟による集団安全保障政策で大歓迎を受けていた。ポリシェヴィヅムに対する反感は別として、一九二二年、経済協力により相互の利益を図るラバール条約の締結以来、ツ連との関係もうまくいっていた。その関係はヴェルサイユ条約の制限を逸脱するライヒスヴェーア（ワイマル共和国軍）の育成に役立つ、再軍備に関するいくつかの秘密の協定も結ばれた。

大恐慌がドイツをも襲い、ナチが急上昇の気流に乗りだすと、ヒトラーはどちらかというと、「生存圏」をあまり表に出さなくなった。先行きがまだはつきりしないどこかの時点で入植地獲得のためツ連と戦争に入るとしても、いまの時点では票集めにマイナスとなる。国民の大多数は自分たちの政府の失敗を認識しており、心中、毎日のように経済が何とかならないかと心配していた。経済の回復と、国民の統一と国力の強化を謳いつつ、国家社会主義のもとでの再出発を呼びかけることがヒトラーのあくなき課題となっていた。「生存圏」のテーマを取り上げないとしても、ヒトラーがそれを放棄したわけではなかった。一方、その容赦ないワイマル民主体制批判はかれの人気を飛躍的に高め、一九三三年一月三十日、大統領のパウル・フォン・ヒンデンブルクから首相に任命されることでその頂点に達した。爾後、かれの対外政策はもはや泡沫政党の短気者のそれではなく、巨大な大衆行動に支えられた最重要人物の遂行する政策の一つとなった。

しかし当初は、「生存圏」獲得ほか、目標とされた対外政策が日程にのぼることはなかった。ヒトラーがまず手をつけたことは国際社会におけるドイツの脆弱性の克服である。再軍備こそ決定的に重要な課題である。もちろんこれは將軍たちが大喜びする話であり、ヒトラーは就任四日に早くもかれらと会っている。その大多数は長年再軍備を望んでおり、解禁の日に備えて秘密に計画を練ってもいた。民主主義がいったん葬られれば、ドイツは再び国力を取り戻し、時間をかければ中央ヨーロッパ、あ

るいはヨーロッパ大陸そのものの覇者となり得るのである。したがって、ヒトラーが一九三三年二月三日に発した軍備増強の決定は好意的にむかえられた。ヒトラーは将来の対外政策の方向についてもほのめかじ、たぶん輸出も増大するだろうと発言した。しかしそう言ってみたのも、実はただちに疑問を付すための前置きにすぎなかった。「たぶん——間違はなくより良い策である——東方での新しい生存圏の確立と徹底的なドイツ化」が代替策として持ち出された。それは一九二〇年代の命題の慎重な再確認だった。それを聞いたものたちは、将来のいつの日か、ヴェルサイユで失われた領土を取り戻し、中欧、東欧でドイツが優位に立つ——基本的にこれらに反対するものはいない——というおほろげな意味以上には理解しなかっただろう。またそれが具体的な対外政策の目標であるということにも思っておよばなかった。しかし、それは対外政策に関するヒトラーの指示だったのである。それはかれの二〇年前の考え方とまったく異なるところがなかった。ドイツがしだいにこの流れを支配するようになり、ついには戦争に至った、続く数年間におけるヒトラーの行動は、単に国際政治上の突発事に乗じた機会主義とみなされるべきではない。たしかにかれは得られたチャンスを十分に利用した。しかしその機会主義はイデオロギーが引っ張っていったのである。

ヒトラーの政府における支配力は、一九三三年夏にはすでに確立していた。かれは巨大な党組織を制御したのみならず、先進的な国家官僚機構を意のままにあやつり、加えて近代的な強制抑圧機関を設けた。一年後、かれは国家の全権限を掌握した。一九三四年六月の突撃隊の指導者たちの虐殺は、かれに歯向かうものへの最後のとどめだった。その後すぐに続いた老ヒンデンブルク大統領の死去は、潜在的な唯一の対抗馬が消えたことを意味した。ヒトラーはいまや政府の統領のみならず国家の統領となった。ヒトラーの個人的準軍事組織の無惨な潰滅で利益を得たものはドイツ陸軍だった。すでに大幅な再軍備計画を支持することによって基礎固めされていたヒトラーへの軍の支持はいっそう強固

なものとなった。一方実業界と産業界は、利益が最大になるとの見通しがあり、同じように新体制を大々的に後援する方向に向かった。

一九三三年から三四年にかけての大変動の塵埃が静まったあと、ナチ体制の意思決定機構は民主主義諸国のそれとはまったく異なったものとなった。たしかにその体制は、ほかの全体主義諸国とも似ていなかった。ヒトラーは、いかなる集団によるものであっても自らの権威が潜在的にでもチェックされることを嫌った。そのため、集団統治の最高機関である内閣の機能は、ヒンデンブルクの死のあとただちに萎縮しはじめた。法令が閣僚の回覧によって成立する方式が考案されて、閣議の頻度は激減した。一九三八年二月以降は閣議そのものが廃止された。したがって、驚くべきことだが、集団的な統治はすべて消滅した。一方、党と政府の二重組織は明確な境界のないまま温存され、政府部内の混乱を招く場面が多く見られた。ヒトラーは政府内の障壁や障害を越えようと、往々にしてかれ自身および党と政府の混成組織に支援された全権を保有する機関を好んで創設したので、このことが混乱を助長した。そして本来の政府組織は動けない状態で放置されたのである。強きもの、力あるものに対するナチの基本的な社会的ダーウィニズムの信仰が際限のない競争と「腕力」の使用を助長した。したがって紙上の地位は、ほとんど、あるいはまったく意味がなかった。人をおしのけて、直接ヒトラーと話ができるものが現実^①に力を持ったのである。重要人物の一人、SS（親衛隊）のトップ、一九三六年から巨大な警察、内務機構を操るハインリヒ・ヒムラーが端的な例を示している。名目的にはヒムラーは実権のない内相、ヴィルヘルム・フリックの部下とされていた。もう一人は、まだ存在していた経済相をさしおいて猛威を振るった、一九三六年以降の四ヶ年計画の責任者、ヘルマン・ゲーリングである。

無数に存在する諸機関、行政機構の無政府状態のなかで、ヒトラーの地位は聖域にあった。かれは国内問題からは常に超然としていた。ほとんどの場合、かれの意思決定は曖昧に聞こえた。「決定」とは、ヒトラーとの定期的な昼食会で、かれが非公式に呟く言葉や閣僚なしで党幹部が聞いたものであり、これが「フューラー（総統）の命令」となるのである。その後の展開が自分の希望どおりに推移するのであれば、戦前にあって（後期は違ってきたが）は、仲裁を求められないかぎり、かれが介入することはあまりなかった。また実際問題として、かれは介入することを嫌っていた。しかし決定的な場面では、どうしてもかれの指示が必要となる。体制の初期のころヒトラーが介入したもつとも重要な例としては、一九三六年、再軍備用の資材確保の問題があげられる。このとき、生産増大、戦争準備のための四ヶ年計画が導入されることとなった。

ヒトラーが戦前の国内問題で「行動指針」を出す以上のことをしていなかったとしても、一九三三年以降の対外問題において、一九三九年のポーランド攻撃で戦争の危険を冒す決断を行うまで、それを含む重要な決定の数々はすべてかれ自身の意思によるものである。しかしここでも、かれは閣議といたった集団的な意思決定を回避している。中央政府が形をなさなくなっていたから、何かを決断するにあたって、ヒトラーは必要とする場合は個人個人の意見を聴取した。一九三七年十一月、軍の指導者と外相を招集した重要会議で、かれは領土拡大と戦争の必要性を詳細にわたって論じたが、その冒頭、この会議のテーマは閣議にかけるには重要すぎると前置きした。ある程度、秘密厳守の意味もあったであろう。対外政策に関する（のちに重大な軍事作戦と関係づけられる）際どい話が知られる範囲を制限することはよく理解できる。一九四〇年一月、すべての軍の執務室にヒトラーの「基本命令」として掲示がかかげられた。「何人も、必要に応じて正規の示達あるまで機密に触れることを得ず」と。とはいえ、かぎられた情報が必要な際には与えられなければならない。この場合その事項は秘密厳守の枠を超える。ヒトラーはフューラーの地位を絶対権力として認識しており、いっさいの干渉を許さ

なかつた。重要事項はかれ一人の決断にまかされ、軍司令官ないし関係閣僚の意見を聞く場合があつても、最終的にはかれが自由に決定した。決定事項は必要とするものに単に伝達されるだけだつた。したがつて、かれの意見に反対することは、不可能とはいえないまでもきわめて難しかった。公の席の反対はおろか、個人的に、たとえ保留したいという意向を表明するとしても、ヒトラーの声高な長広舌の弾劾を覚悟しなければならなかつた。さらにヒトラーは軍部のエリートたちの応援を当てにすることかできた。一九三八年の夏、その秋にチェコスロヴァキアを攻撃する（のちにミュンヘン会談における西欧諸国の介入で延期された）というヒトラーの決断に猛反対した参謀総長のルートヴィヒ・ベック将軍は、孤立無援に陥り、絶望して辞任した。かれは事態を何も変えることができなかった。

一九三三年以前、ヒトラーは政敵に対処するに際して精緻なアンテナを張り巡らせ、その弱点に眼をつけた。一九三八年までの対外政策の成功は、無頓着な直観と、それと対になった高度なリスクを取るヒトラーとしての素質によるものだつた。新しい、断固としたヒトラーの対外政策の第一歩は、一九三三年十月、軍縮会議と国際連盟からの脱退で示された。これは外務省と軍部の指導者の完全了承のもとに行われた。時期を選んだのはヒトラーだつたが、この一手は、當時のどんな国家主義的政府が行なつたとしても支持されたろう。一九三四年一月、ヒトラーは対ソ関係の縮小を進め、ポーランドと不可侵条約を締結した。これは外務省の意向に反しており、ヒトラー独自の動きだつた。かれは徐々に自信をつけ、大胆になつていった。一九三五年三月、かれはヴェルサイユ条約の重要な部分に違反をしても、西側民主主義国が何ら行動を起こさないことを正しく予測し、ドイツ空軍の創設と軍拡のための徴兵実施を宣言した。ヒトラーはこの決断について軍幹部や閣僚とまったく相談をしていない。一九三六年初頭、アビシニア（エチオピア）の危機に際し、かれは再度、西側民主主義諸国の脆弱性を見抜き、ラインラント再軍事化の好機到来と判断した。——これも歴代の国家主義的

政府の行程表にあつたものの一つである。この問題は外務省と軍幹部の驚くほど広範な層で懸案として注目を集めていたが、ヒトラーはこの件で一ヶ月ほど躊躇し、多くのものの意見を聞いた。あるものは危険がありすぎると忠告した。ヒトラーは耳を傾けた。しかしヒトラーは反対意見を退けて一人で決断した。この勝利でかれは際限のない自信を手に入れ、勝ち誇つた声明はそのままプロパガンダとなつた。「わたしは神の摂理によって用意された道を、確信をもって夢遊病者のごとく歩む」⁽³⁾

しかしその道は決して直線ではなかつた。一九二〇年代のなかばから、ヒトラーは英国を友好国、かつ同盟国にしたがつていた。あり得べき、また自らが望む「ユダヤリポリシエヴィキ」との戦争をともに戦いたかつたのである。しかし、一九三五年に締結された英独海軍協定の動きなどが両国の連携を匂わせたものの、同盟は幻に終わった。たがいの懸隔は広がり、一九三八年、英国首相のネヴィル・チェンバレンがヒトラーを「宥和」したときも溝は埋まらなかつた。そのかなり前から、ヒトラーはイギリスをドイツの敵の一つと認識していた。またかれは、イギリス自身もその背後に控える帝国諸国と歩調を合わせ、遅きに失したとはいえ慌てて軍拡に走りだしたことを知っていた。一方、大西洋の向こう側には巨大な潜在力を持つアメリカが手つかずのまま、孤立主義者たちに封じ込められていた。第一次大戦でドイツの運命を決したのはアメリカの参戦だったので、アメリカは将来の敵としてまことに警戒すべき相手だつた。換言すれば、時はドイツに味方してはいなかつた。ドイツは速やかな再軍備計画を早めにスタートさせた利点を持っていた。しかしその利点は永続きしないだろう。ヒトラーは賭けに出た。いつもかれが言っていたように、行動することよりも待っていることの方に、より大きいリスクがあつたのである。

早期の行動をせまるもう一つの要素があつた——経済である。初期段階を超えたあとの再軍備はすべて、容赦ない財政支出と統制された経済運営によって遂行するしかない。単純なことでは、

兵器生産と増加していく人口の生活水準維持の双方を担うための資源が不足しており、必要物資は輸入しなければならぬ。武器費用の捻出は食糧削減を意味する。大砲とバターが両立するのはかぎられた期間のみだった。一九三〇年代の後期にはすでに問題が起こっていた。経済全体に警戒信号が鳴っていた。戦争が始まったとき、それは経済危機の結果として起こったものではなかった。というよりも、経済危機のようには見えなかったものは、戦争のために経済再構築を図るイデオロギー上の至上命題の結果だったのである。一九三〇年代の終わりころまでにヒトラーは、一つは国際的なドイツの劣位がまだまだ続くと思っていたこと、もう一つは景気好調がいつまでも永続きはしない、と思っていたこと、この二つから何らかの行動を取る必要に迫られていた。

ヒトラーは外的圧力によってのみ行動したわけではない。というよりも、外からの圧力はどのみち動こうと思っていたヒトラーの背中を押すだけだったのである。ヒトラー体制の初期、反ポリシェヴィズムの概念はヒトラーの対外政策作りにならして寄与していなかったが、一九三六年以降は変化しはじめる。その年の夏に始まったスペイン内戦で、ヒトラーはポリシェヴィズムに対する思いを新たにはじめた。ヒトラーは思想上の理由で、(最初にスペイン、次にフランスを取り込もうとするポリシェヴィズムと戦う)スペイン共和国政府に反乱を起こした国家主義者たちの指導者、フランシスコ・フランコ將軍に軍事的援助の申し出を独断で行った。その年の夏の終わり、四ヶ年計画に関するかれの覚書の前置きには、「ロシアとの対決は避けられない」、という記述がある。一九三七年までにヒトラーは、続く五年ないし六年以内におけるヨーロッパの大戦を予期した。かれはスターリンのことを「脳を患っている男」と呼び、ポリシェヴィズムを「いつかは打倒しなければならぬ危険」にたとえた。したがってヒトラーは、一九二〇年代に発展させた思想上の目標を変えていなかったこととなる。戦争に先立つ数年、現実の対外政策においていささか調整が加わっていたとしても、それは一時

的な情勢にしたがって薄まっていたにすぎなかったのである。一九三九年八月、ヒトラーはナチのイデオロギーに刷り込まれていたソ連に対する敵意を引っくり返して、不倶戴天の敵と不可侵協定を締結するという、息を飲むような皮肉な現実主義の一手(スターリンもその現実主義を共有していた)を打つことによって、最終的調整を終えた。しかし当時であっても、この劇的な協定の少々前の時点で、つたえられるところでは、ヒトラーが国際連盟の高等弁務官だったスイス人のカール・ブルクハルトにこのように述べたという。「わたしの考えていることすべてはロシアに対するものです。西側が愚かで、盲目でこのことを理解しないのであれば、わたしはやむなく、西側を叩くということでロシア人と話をつけることになるでしょう。その後、全力を挙げてソヴィエト連邦に進撃します」

その頃には欧州の戦争は確実とされた。ヒトラーはだれよりもそのことを予期していた。決定要因の組み合わせ——イデオロギー上、軍事戦略上、経済上の——が加速度を高め、当初自らが一九四三年ころと想定していた戦争への時間的間隔を短縮した。西側諸国との即時の紛争を避けようとするヒトラーの仕掛けの余地は狭まった。一九三八年、チェコスロヴァキアの犠牲のもと、英仏はミュンヘンでヒトラーに譲歩し、懸念していた戦争を回避した。ヒトラーは同じことをポーランドで期待した。ダンツィヒと回廊問題で要求を通すことはそれほど難しいものとは思えなかった。しかしこれはヒトラーの誤算だった。一九三九年三月、チェコスロヴァキアの残りの部分を、半年前とは異なり、西側と協議なしに占拠する行動に出たことで、宥和政策の支持基盤を破壊してしまったのである。ヒトラーは八月の終わり、最後の瞬間まで、英仏は依然、譲歩の姿勢にあり、かれらの干渉なしにポーランドを屈服し得ると思っていた。しかしドイツ軍がポーランドへ侵入した二日のち、——必ずしもかれの選んだタイミングではなかったにせよ——ついに戦争が始まった。暫時、かれが本当に望んだソ連との戦争はお預けになった。

ポーランド戦役は一方的に進み、三週間少々で圧倒的な勝利に終わった。十月六日、ヒトラーが国会の演説で呼びかけた中途半端な和平提案を、ロンドンとパリが真摯に受け取るとはかれも期待していなかった。ヒトラーはすでに次の動きを視野に入れていた。時は敵に有利に働く、先んずれば人を制す——これがヒトラーの哲学だった。ポーランドでの勝利が容易だったことはヒトラーを性急にした。かれは西側をすぐにも攻撃しようとしていた。ポーランドは敗北し、さしあたり新しい同盟国のソ連の危険はなく、東部は安全だった。西部戦線が前方に広がっていた。これ以上に状況の良いときはないだろう。この機会を捉えればフランスは手を上げ、イギリスは弱さを自覚して交渉に応じるだろう。西の戦争に効率的に勝てれば、かれが常に希望していた戦いに向かって集中できる。東方の「ユダヤ・ポリッシュ・イズム」との対決である。スターリンのロシアを撃滅し、「生存圏」と無限の資源を獲得してドイツの長期的な先行きを確保するのである。これが一九三九年秋のヒトラーの考え方だった。

将軍たちは西側に対するそういう危険な早期攻撃には、気象条件も悪くなるので、消極的だった。弱体で時代遅れのポーランド軍を短期に破ったことと話は別である。精巧に作られたマジノ線に防禦されたフランスの大軍に攻勢をしかけることは、強力なイギリスとその帝国が援軍に加わることを考えれば、まったく別の話となる。将軍たちは軍隊の装備がまだ完全ではないことを知っていた。強力な敵との戦いは長期戦となるに違いない。短期に終わったポーランド戦役でも、ドイツ軍戦車と自動車両の半数が故障した。西側攻撃をただちに行って戦争を続行することは、かれらの眼からは考えられないことだった。

将軍たちの逡巡と警戒にヒトラーは怒った。しかしヒトラーはかれらが正しいと多分思っていたのだらう。いずれにせよヒトラーは、悪化する天候、輸送問題に対するかれらの懸念に譲歩した。西方への攻撃開始は何度も——全部で二九回——延期された。詳細な作戦計画は一九四〇年二月まで作成されなかった。そして、スカンディナヴィアへ介入する必要に迫られ、四月、デンマークとノルウェーへの侵入の口火が切られた。作戦の延期は、兵力確保の面からは貴重なものとなった。そしてついに、だれも予想しなかった大胆かつ華やかな戦術で、ベルギー南部のアルデンヌの森林地帯を突破し、フランス低地帯帯に入って大西洋沿岸に迫る大戦が成功した。この作戦はもともとエリッヒ・フォン・マンシュタイン中将の靈感から発したものであるが、陸軍最高司令部の月並みな作戦に苛立ったヒトラーの発案した軍事命令ということにされて、横取りされてしまった。五月十日早朝に実行された攻撃はこの計画が下敷きとなった。

総攻撃はヒトラーも予想しなかったほどの大成功をおさめた。オランダは五日後に降伏した。一世代の間に二度もドイツ軍に中立を侵されたベルギーは、もう少し長く、五月末ころまで持ちこたえた。ベルギーの小さな軍隊は勇敢に戦ったが、ドイツの力にはかなわなかった。紙の上では強力だったフランス軍は、指揮もまずく、装備も貧弱、士気が低下しており、ドイツ国防軍の敵ではなかった。ライン対岸からの攻撃を身命賭して守りぬくと喧伝されたマジノ線は実質的に役に立たず、お伽話の砦だったことが証明された。砦はドイツ主力の攻撃を食い止められず、単純に迂回されて終わった。反撃は躓いた。攻撃開始後五週間足らずの六月十四日、ドイツ軍はパリに入城した。フランスが講和を申し出たというニュースがその三日後にどいたとき、ヒトラーは勝ち誇った。かれのフランスへの復讐は完璧だった——六月二十一日、一九一八年にドイツが降伏を強要された同じ鉄道客車内でかれは休戦文書に調印した。勝利の規模はヒトラーを誇大妄想の初期症状に導いた。ヒトラーの自己賛美（そして不敗の神話）は将軍たちの喝采によって倍加した。何人かの将軍たちも、いやいやながら、ヒトラーのもとで可能になったことの大きさ、とほうもない成功をおさめた攻撃の戦略と計画におい

てヒトラーが直接果たした役割を認めなければならなかった。さて、西部での完勝に立ちはだかるものは英国だけである、ヒトラーは思った。かれらはわかるはずだ。折り合いがつけられるだろうか？

2

一九四〇年七月六日、ヒトラーは、フランスに対する大勝利と驚嘆すべき西部戦線の結果に熱狂する大群衆の待つベルリンに戻った。それはかれがまだ経験したことのない最高の帰国だった。花で飾られた帝都の街路には数十万人が長時間立ちつくし、終戦はすぐ目の前にあるように思われた。

最終の勝利に至る道には、イギリスが残っているだけだった。歓呼する群衆のなかで、イギリスが強大な国防軍の敵になり続けるだろう、と想像するものはほとんどいなかった。しかし、フランス軍を圧倒的に破って意気盛んな状況にあっても、ヒトラーの軍事顧問たち、またヒトラー自身も英国の抵抗を簡単に退けられるとは思っていなかった。その背後には依然おぼろげながら米国の影がちらついていたのである。まだ声を高くして話をする、という雰囲気ではなかったが、一九一七年と同じようにアメリカがその巨大な力と富を戦争に動員すれば、ドイツ完勝のチャンスはたちまち失せてしまおうだろう。二つ問題があった——一つはいかにしてイギリスを駆逐するか、もう一つはいかにしてアメリカを蚊帳の外においておくかの問題だった。フランス降伏直後に続く数週間、これがヒトラーとドイツ軍上層部に漠然と宿った問題意識だった。第一の優先順位は、話し合いに応じるようにさせる（不調に終われば軍事力を行使する）だった。戦争からイギリスが脱落することは、アメリカにヨーロッパ問題から手を引かせ、一九二〇年代からのドイツの宿願である戦争をヒトラーの自由にさせることだろう。それは「ユダヤ・ポリシエヴィズム」打倒の戦いであり、ソ連を犠牲とする広大な東方

帝国の獲得である。

しかし七月十九日、ヒトラーの国会演説のあと一時間も経たないうち、最初の新聞報道が、ドイツとの和解を求め英帝国の破壊を避けるというヒトラーの「理性への呼びかけ」に対する、イギリスからの氷のように冷たい反応をつたえてきた。七月二十二日、英国外相ハリファックス卿のラジオ放送はヒトラーもすでに承知していることを公表した。イギリスは和平交渉をする考えはない、戦争を継続する、と。ヒトラーはハリファックスの演説の前、「呼びかけ」に対するイギリスの全否定を予想しており、七月二十一日、その秋のソ連邦侵攻の見込みについて陸海空三軍の総司令官たちと協議を行っていた。

ヒトラーの心底にある考えは、二〇年もあたためてきたイデオロギー上のものだった。ソ連攻撃によって、ポリシエヴィキの世界観に具現するユダヤ人の力を打ち砕く、同時にドイツ人入植者のための「生存圏」を獲得する。勝利はドイツをヨーロッパの覇者に押し上げ、最終的に世界支配をアメリカと争う、人種的に純粋な帝国の基礎を形造る。しかしいま判然としたことは、ヒトラーの思っていたように、イギリスの支援を得て（少なくともその黙認によって）のポリシエヴィズム打倒の戦いができなくなったことである。この局面に至ってイギリスは、かれが長年抱いてきた構想に異議をとない。しかしいずれにせよ、イギリスはそうせざるを得ない状況に追いこまれるか、少なくとも敵対者の仲間からは降りてもらわなければならない。「総統はどうしても和平交渉に乗ってこないイギリスの出方に困惑しきっていた」と陸軍参謀総長フランツ・ハルデーは七月十三日に記録している。「かれはイギリスがロシアを頼りにしているからだ、と見た（われわれも同じ）。そこで和平を強要させる奥の手をつかうことにしたのだ」ということは、イデオロギー上の動機がいかにあったとしても、その秋ソ連を攻撃するという驚くべき決断の緊急性に着目すると、それはイデオロギーよりも軍事戦

略を優先した判断だったといえる。七月二十一日、ヒトラーが三軍の総司令官たちに提示したのはそのことだった。

イギリスで起こっていることについて、はっきりした絵は描けない。ヒトラーは述べた。「軍事的に決着を図る準備はできるだけ早期に完了するように。ヒトラーはそのための軍事、政治の主導権を自分は手放さないと言った。ドイツは戦争に勝ったのだ、かれはだしぬけに言った。イギリスの明日に希望はない。しかしイギリスが戦いを継続するのは、いつの日かのアメリカの援助を当てにしているからだ。そして、ロシアに望みをつないでいる。からだ。ロシアがバルカンで紛争を起せば、ドイツへの原油供給を切断できる、またイギリスは、ソ連をそそのかしてドイツに敵対させることもできるだろう。ヒトラーは見解を述べる、スターリンはイギリスに戦争を続けさせ、わが国との関係を薄める。そして時間を稼ぎ、講和が始まってしまつては手に入らないものを手に入れようとしている。ヒトラーの結論は、九月なかばまでにイギリス侵攻作戦を実施して、これを打ち破る」というものだった。しかしその見通しとなると心もとないものだった。かれは海峡横断を「非常に危険なもの」と思っていたし、侵攻作戦は「イギリスと折り合いをつける手段がほかにない場合にかぎって」行われる、と述べた。かれの考えでは、ソ連の覆滅がイギリスに対する圧力となるのである。「われわれはロシア問題に集中し、その計画を樹立しなければならぬ。目的は、ロシア陸軍を叩き潰すか、少なくともベルリンとシベリア工業地帯への空爆を防ぐに必要なロシア領を確保することである。侵攻軍の編成には四週間から六週間必要である。この秋にロシアを攻撃すれば、英国との航空戦による圧迫が軽減されるよう」。

したがってかれは、西方の戦いが完全に勝ちをおさめていない段階で、短期間の（かれはそう思っていた）東方の戦いを始めるつもりだった。これは軍事戦略家も一般大衆も怖れる二正面作戦である。七月二十九日、国防軍最高司令部作戦部でヒトラーの主要な戦略顧問アルフレート・ヨードル将軍が直属の部下たちに東方作戦を開始する話をしたところ、一時間ほどの猛烈な議論が始まった。それがかれの信念であったのかどうかは不明だったが、ヨードルはヒトラーに反対する意見に異議をととなえた。ポーリッシュェイズムとの対決は避けられない、ドイツの軍事力はいま最高の状態にある、だからそれはいま始めるのが良い。そして一九四一年の秋には、東方で勝利をおさめたドイツ空軍が再度イギリス打倒に動員されるだろう。ヒトラー自身は二正面戦争に懸念を持っていなかった。フランス降伏のとき、西方の勝利に酔いしれて、「対ロシア戦役は兇戯にひとしい」と軍事顧問たちに語っていた。

ヒトラーはロシアとの戦争を、大陸におけるイギリス最後の潜在的同盟国を駆逐するために必要である、と正当化していた。またかれは、ソ連は「日本を睨むイギリスとアメリカの極東の剣である」と主張していた。その趣旨はこういうことである。すなわちソ連に対する勝利は、日本が背後のソ連の脅威を気にせず、南方へ進出することを許し、極東における英国の力と太平洋におけるアメリカの力を削ぎ、アメリカの大西洋とヨーロッパへの介入を阻害する複合効果をもたらす、ということである。したがって短期間の東方作戦は、ヨーロッパ大陸の完全制覇のみならず、戦争の最終勝利にもつながるのである。その後将来のどこかの時点でアメリカと対決する。ソ連侵攻についてのヒトラーの考えのなかには、イデオロギーと軍事戦略の概念相互に矛盾はなかった。この二つは手を組んだ。動機の基本には常にイデオロギーがあるものの、実際の意思決定では戦略が優先した。

その秋のソウイェト攻撃の見通しがまったく立たないことがすぐに判明すると、ヒトラーは一九四一年五月に計画を延期した。それは七月二十九日のヨードルとの面談で決められ、二日後に軍幹部に示達された。それは重大な決定だった。多分、戦争の全過程でもっとも重大な決定だったろう。

それはまったく自由に決められたことだった。すなわち、それは自らに押しつけた抑圧観念だけで決められたものではなかった。また、ソ連側からの即時攻撃をふせぐためにとられたものではなかった。当時、先制攻撃の必要を示す兆候はまったくなかった——後日になって言い訳がなされたが。ヒトラー自身がその十日前、ロシアはドイツとの戦争を望んでいないと認めていた。その決定は軍部からの、あるいは体制内部からの圧力によるものではなかった。実際にヒトラーの示達の一日前の七月三十日、陸軍総司令官ヴェルナー・フォン・ブラウヒッチュ元帥と、参謀総長ハルダー上級大將は、「ロシアとは友好関係を築いておくことが望ましい」ということで合意していた。二人は地中海（とくにジブラルタル）と中東のイギリス拠点の攻撃に兵力を集中することを優先しており、バルカンとペルシア湾のロシア軍の展開には脅威を認めていなかった。そしてイタリアの地中海帝国建設に助力すること、またイギリスとの長期戦に腰を据えて取り組むためにヨーロッパの北方と西方でドイツ帝国を確立しようと、ロシア人と協力することすら考えていた。

ヒトラーを駆り立てていたのは、まったく主観的なものだった。国力と軍事力のバランスに基づく戦争全体の主導権がドイツからイギリス、ひいてはアメリカに移るのを許す気がないなら、そくぎにソ連を攻撃しなければならぬとヒトラーは認識していた。そしてその主観上の圧力は、ドイツの戦争を支える経済的論理によっていっそう強められた。それは換言すれば「生存圏」の思想に根ざし、グロースラウムヴェルツェン、シャフト——広域経済圏という考え方に密接に関係している。対仏勝利の熱狂が消えはじめると、ヨーロッパ大陸をドイツが経済的に支配するという期待には、現実には、ソ連というアキレス腱があることが見えてくる。事実、一九四〇年夏、ヒトラーはスターリン協定上の経済的合意事項によって、ドイツはソ連から相当量の食糧、原材料の供給を受けていた。しかしヒトラーは経済相から知らされていたが、ドイツがイギリスと、さらに徐々に確度が高くなってきているアメ

リカセの長期戦を戦うには、現状のソ連の物資供給をはるかに超えるものが必要だった。短期的には、スターリンは時間を稼ぐために、それ以上のドイツへの物資提供に応じるかも知れない。しかしそれではソ連への依存度が高まりすぎ、ヒトラーにとって不安定きわまりない状況となる。ヒトラーは、ドイツの「広域経済圏」は「わが国が何ら影響力を行使できない勢力に依存」すべきではない、という経済相ヴァルター・フンクの意見に同意した。この考え方は、国防軍、大企業、官僚機構の指導的諸方面に広く共有された。このことは、ヒトラーのソ連攻撃の決断については、これらの基幹的階層からの幅広い支持が期待され得るということを意味していた。

この冒険は一部高官に不安を抱かせたとしても、ヒトラーは軍の指導層からの反対、反論を受けなかった。実際、この結論を予期して、陸軍参謀本部はヒトラーの示達の一週間前に作戦計画を準備しはじめた。軍幹部もヒトラーと同じような戦略を考えていた。かれらも英国を侵攻ないし爆撃で屈服させるのは無理であり、最終勝利に向かう道はほかにないと考えていた。さらにヒトラーと同じように、赤軍をきわめて過小評価していた（とくに数ヶ月前のフィンランドとの「冬戦争」で示されたそのお寒い戦いぶりを見て）。またポリシェヴィズムに対する嫌悪感をヒトラーと分かち合い、あるものたちは、ソヴェト体制をユダヤ人の支配体制と見るところまでヒトラーと一致していた。しかしかれらとても、フランス敗北後の数週間で、ソ連侵攻を大至急準備することを推奨までするかどうか、疑問もあった。いずれにしても決断はヒトラーのもので、かれが単独で行ったものであった。

その決断が招いた大破局は、一九四一年秋以降、恐るべきロシアの冬の到来によりドイツ軍の進撃がモスクワで押しとどめられるに至り、より明白に現れてくることとなる。しかしここでの問題は、侵攻それ自体を云々することではなく、その一年前に取られた決断の過程にある。「バルバロッサ作戦」として知られるこの作戦の兵站が完全に準備されていたとしても、英国の戦争継続意思と米国の最終

的大参戦の可能性による脅威をドイツが排除する（または脅威を低める）もっと良いチャンスが手に入る選択肢をヒトラーは持っていたのだろうか？ ドイツ海軍の上層部はそう思っていた。また二期、外務省もそういう意見だった。

一九四一年七月三十一日、翌春、ソ連攻撃を開始するとした実質的な決定は、十二月十八日になるまで軍命令として発動されなかった。その命令そのものは、もちろん、侵攻開始を意味するものではなかった。しかし、十二月、輻輳機は後戻りできない状態で進撃の方向に切り替えられた。一方、一九四一年七月から十二月にはさまれる四ヶ月間、ドイツの戦略決定にあたって、ヒトラーは不思議に優柔不断だった。対外問題ではほかの二流の独裁者ムッソリーニとフランコーや敗戦国フランスの指導者、ハットン元帥にくらべて圧倒的な権力の絶頂にあるヒトラーが、どの道を取るべきか、躊躇し、迷い、弱気にすらなっていた。東方の戦争について、軍事作戦、外交政策について、ときに矛盾した意見にも左右されている様子だった。しかし秋も遅くなってやっと、かれはこれまで迷ったことのない道に立ち戻った。モスクワ経由でロンドンを征服する最終勝利獲得のため、できるだけ早い機会にソ連を攻撃する。それは測り知れない震度をとまらぬ運命の選択だった。

決断をするからには、オプシヨンがあることが前提になる。一九四〇年夏、ドイツの指導者にはどのような戦略的可能性が眼前に展開していたか？ 戦後になって、ほかの——軍事的にはるかに有利な——選択肢があったが、ヒトラーがソ連攻撃に固執したという主張はまればない。それは「ドイツの悲劇」をヒトラー個人の責任以上にしたくない。部の軍部リーダーに弁解の余地を提供する。だが、それに続く歴史研究は、例外なく、ヒトラーの東方の戦争をイデオロギー上の至上命題と位置づけ、おおむねそれに疑念を抱いていない。

ヒトラーが戦略を決めた。それは間違いない。加えて、ヒトラーは最高指導者としての地位にとまらぬ権威を守ることに汲々としていたから、長々しい議論はもちろん、こまごまとしたアドバイスを求めたりせずに決定は行われなければならなかった。政策オプシヨンの評定の一部は、いかなる基準に照らしても、それらを形造り、指導層に提供する統治システムの機能に依拠してはなかった。第三帝国の特質を前提とすれば、分別ある選択肢がヒトラーのところには上がってくる可能性はあまりなかった。イギリスの戦時内閣が、三日間の徹底的な討議を経て、戦争継続という集団的な結論に至ったことに対し、ヒトラーは七月三十一日、翌春のソ連攻撃開始の準備を行うべし、と將軍たちに単純に通告しただけである（最初の計画叩き台を作った軍幹部側近を除く、だれの意見も聞かずに）。ドイツ政府の文官はいっさいこの決定を知ることがなかった。

これまで見てきたように、ヒトラー政府の支離滅裂ぶりは、ほかのいかなる独裁国家にくらべても突出していた。最後に政府の閣議が行われたのは一九三八年の初めであり、その後、残存していた、集団的な統治機構も消滅した。同じ時期、一九三八年の初めころ、ヒトラーは軍の指導権を自らの手に集中した。ヒトラーの戦略運営機関として設けられた国防軍最高司令部は、英国の参謀総長たちが戦時内閣のために集まった会議のような、戦略討議の集団的諮問機関の役割を果たしてはいなかった。結果的に陸、海、空の三軍を統括する首尾一貫した計画が作られることは、ほとんど、というより、まったくなかった。三軍総司令官たちは、それぞれがヒトラーと相互に関係を保っているだけで、三軍は互いに並列的に仕事をしていたのである。

したがって、まったく異なった戦略が色々形を現してきた。そのうち一つが海軍独自の選択肢だった。それはヒトラーのものと大きく相異なるものだった。しかし海軍は、戦争をもっと有利に導く、東方での潰走を防ぐ実現可能な選択肢を提供できたのだろうか？ そしてそれがヒトラーに無視されたのだろうか？

ドイツ海軍の「メテオス」、影響力、資源をめぐって常に陸軍、空軍と激しい攻防を繰り返していた。この指導者たちの考え方には、領土拡大、世界の最終支配という野心が同じようであったとしても、ヒトラーの見解とは初めから大きな隔たりがあった。ヒトラーがソ連を粉砕し、東ヨーロッパで巨大帝国を築き、遠い将来のいつの日かアメリカと対決できる難攻不落のドイツを作るため、イギリスを利用しようと考えていたことに対し、海軍は戦争目的の中心に世界強国イギリスの打倒をおいていた。海軍は、古典的な海上戦争で、ロイヤル・ネイヴィーを打ち負かすに十分な、大規模で力ある艦隊の保有を切望していた。この艦隊は、広大なドイツ植民帝国建設と相俟って、世界征服競争でアメリカに挑み、敗北させる基盤となるだろう。もちろん、どこかの時点で邪悪なポリシェヴィズムは破壊されることになるだろう。しかしこれはさしあたって封じ込んでおいて、ドイツの優位が確定したあと叩けば良いのである。

基本的に第三帝国の海軍の思想は、テイルピッツのものを時代に合わせて改良したものにはかならない。それはドイツ帝国主義の二つの要素のうちの一つ、海外植民帝国の樹立に基礎をおいたものである。ヒトラーの（そしてナチ党の）考え方は、同じようにヴィルヘルム時代に根源をおく帝国主義のもう一つの要素から発している。それは東方への拡大、東ヨーロッパの征服である。陸軍にとって、この後者の要素、大陸の覇権確立のための大兵力確保は本源的要請としてまことに魅力的だったが、海軍にとってはまったく違った。この海上、陸上の選択肢は戦争前の時点では両立が可能だった。陸、海、空の三軍は資源争いをしてしたが、一つに決める必要はなかった。しかし一九三九年、大艦隊建

設のZ計画が決定されると、海軍は一人歩きを始めるように見えてきた。

ところが、一九四〇年代なかばに必至と見られる大戦争に備えるという海軍の方針は、ポーランド危機が招いた一九三九年九月三日の対英戦争勃発ですっかり予定が狂ってしまった。英仏がドイツに宣告したまさに当日の九月三日付けの覚書で、海軍総司令官エーリヒ・レーダー元帥は、ヒトラーがドイツを時期尚早の戦争に引きずりこもうとしている、と批判に近い意見を提出した。海軍は一九四四年から四五年にかけての「外洋での戦い」に向けて、Z計画にしたがい装備を強化しつつあったが、一九三九年の秋の段階では「イギリスを相手とする大闘争」ができる状態とはほど遠かったのである。

しかし、一九四〇年の春から夏にかけて、この陰気な気分はかぎりない楽観主義にとって変わられた。四月のスカンディナヴィア攻略で海軍がその役割を果たしたあと、五月、六月の西部戦線における出来事、その頂点にあった劇的なフランスに対する勝利で、海軍の提督たちは海外領有地を防禦する軍事力に自信を持ち、将来のドイツの世界支配について幻想を抱きはじめた。広大な領土併合が見込まれた。六月三日に綴られた海軍少将クルト・フリッケの覚書によれば、デンマーク、ノルウェー、フランス北部がドイツの北西海域防衛のためにドイツ領に編入されることになっている。それらの領土帯は、主にフランスとベルギーから取り上げる。加えて旧植民地を返還させ、またイギリスとポルトガルから交換によって手に入れた土地を合わせて中央アフリカに一大植民帝国を建設する。アフリカ東岸の沖合い、とくにマダガスカルに防衛基地を設置する。

バルト海の司令官で、長年レーダーの後継者と見られているロルフ・カールス大將はその先までいっていた。ベルギーとフランス（ノルマンディーとブルターニュを含む）の一部をチェコの処理法と同様の保護領とする。フランスの植民地は、ドイツ、イタリアと部分的にスペインとで分ける。南ア

フリカとローデシア南部は英帝国から切り離して独立国とする。ローデシア北部はドイツ領として、ドイツ領東フリカと西フリカの架け橋とする。ベルギー湾の英国権益、とくに油田地帯のものはすべてドイツに引き渡される。英仏のスエズ運河管理権はすべて廃絶される。中東の英国の委任統治は終了する。ドイツはシエラレオネとチャネル諸島を領有する。ドイツの戦略基地が、カナリア諸島（多分スペインとの領土交換によって）、アフリカ西岸のダカール（フランスの犠牲において）、マダガスカル、モリシャス、インド洋のセイシユールに設置される。カールスはこれらを「幻想的」と自ら認めているが、ドイツによる地球上の領土に対する、これを最後とする要求の実現として自己弁護している。

七月十一日付けの別の覚書では、イギリスが完敗を喫し、その帝国が崩壊したあと、巨大な植民帝国を防衛し、アメリカと戦うために最大規模の戦闘艦隊が必要である、と力説している。沿岸防備の規模を大幅に拡大される。大西洋を横断する攻撃に備えるため、アゾレス群島、カナリア諸島、ケーフ・ウ・ルデ諸島に基地が必要となる。エトギニアとマダガスカルの領有が、インド洋経山の侵攻に備える意味で重要となる。インド洋、紅海、地中海を押えれば、ドイツ本国と植民地との連絡は容易となる。このビジョンは息を呑むように壮大ではある。そしてそれはヒトラーだけにとどまらない、ドイツのエリート達の傲慢さの象徴でもあった。

これら覚書の内容は現実の戦略とは似ても似つかない。最終勝利が目の前にあるかのように酔いしれた誇大妄想の産物だった。実際、当面の懸案であるイギリスの打倒なくして、かれらの夢の第一歩すら踏めないのである。一九四一年の夏、ヒトラーは翌春ソ連を攻撃するという決断をくだしたのみで、海軍には何の戦略的準備もさせていなかった。ヒトラーの関心は終始一貫、中央アフリカではなく東欧における帝国の建設であった。海軍の考えとは異なっており、アフリカの植民地建設は、ポリシエ

ヴィズム打倒の前ではなく、そのあと、行うものであり、そして避けることのできない米大陸との対決に備える、ということとなる。

さて現実問題として、海軍指導部は夢から醒めて、数週間前からの懸案——その秋のイギリス侵攻作戦準備に専念した。背後からの英国の干渉を防ぎ、安心してソ連を攻撃できる態勢にするためである。

英国侵攻作戦の予備的計画は、一九三九年十一月から研究が始まったが、本格化したのは一九四〇年六月からである。フランスが講和を申し出た当日の六月十七日、国防軍最高司令部国土防衛局長ヴァルター・ヴァーリモン少将が、レーダーに、ヒトラーはイギリス上陸をするつもりがないと言っている、「途方もなく難しいことだから」と。これは陸軍中樞部の考えに近いものだった。したがって、国防軍最高司令部は侵攻作戦について何も準備をしていなかった。ヴァーリモンは同じように、海軍指導部の戦略目標とヒトラーの考え方がまったく異なることを指摘し、ヒトラーがイギリスの世界帝国を完全に破壊しようとは思っていないはず、と請け合った。それは「白人の不利になることだから」と。ヒトラーは「植民地の返還と、ヨーロッパ問題に口出しをしないこと、という条件だけで」フランス敗北に続けてイギリスとの講和をまとめたいと考えていた。

しかし二週間と経たぬうち、国防軍最高司令部作戦部長でヴァーリモントの直屬上司、またもつともヒトラーに近い軍事顧問のヨードル将軍が、イギリスが和平条件に応じない場合、降伏を迫る戦略を考案した。これは上陸作戦を包含するものの、「周辺戦争」というべき、イタリア、スペイン、ロシア、日本など、英帝国打倒から利益を得る国々から一定の支援を受けようというものだった。そこにはイタリアのスエズ運河攻撃とジブラルタルの占領が特筆されていた。夏から秋にかけて、「周辺戦略」は研究され続け、たまたま海軍指導部の考え方と一致する様相を呈しはじめた。

一方、英国上陸作戦の計画は永続しなかった。ヒトラーは当初から、最終手段としてのこの作戦にはきわめて懐疑的だった。かれは上陸にも、とも必要なものは制空権の確保であることを強調した。レーダーにまつたく異論はなかった。海軍の指導者たちはそのことに不安を抱くのみならず、七月なかばころには、輸送問題にも甚大なる懸念ありと口に出していた。それだけでなく、ドイツ軍がイギリス上陸を果たしたあと、英海軍に、後続の上陸を阻まれた上、連絡を遮断されれば「展開した全陸軍の死命が制せられる」こととなる。さらに、八月中旬までに上陸作戦準備を完成することは幻想であることがすぐにはわかってきた。翌月なかばまで再検討を延期するということは、英仏海峡の気象状況からして、翌年の春到来以前には実施期間がほとんど残されていないことを意味する。八月の終わり、海軍には新しい予定日、九月十五日までにしか輸送準備を完了できないことがわかってきた。それ以前、七月末にはすでに海軍軍令部（ゼークリクスライトゥング）は、一九四〇年中の作戦に反対する答申を行っており、早くとも翌年五月までに延期すべきであると主張していた。七月三十一日、レーダーはこの意見をヒトラーに提出した。ヒトラーはその困難性を理解したが、最終判断は、ドイツ空軍がその後継して八日間、イングランドを爆撃するので、その効果を判定してからくだされることとなった。シー・ライオン（あしか）作戦の無期限延期は、九月十七日まで実際には公表されなかった。現実にヒトラーは、英国上陸の見通しには常に弱気で臨んでおり、「バトル・オブ・ブリテン」の帰趨が鮮明になるはるか以前の七月二十九―三十一日ころすでに、上陸困難という結論を受け入れていた気配がある。ロシア侵攻の決断が速やかに英国侵攻の決断に取って変わった。そちらの方が危険度が低かったのである。

レーダー元帥は事態の推移を、ヒトラーが対ソ戦争の準備を決定した七月三十一日のベルクホーフ軍事指導者会議の結論にまかせていた。この宣言には、新しいことは何もなかった。レーダーはその一〇日前、ヒトラーが最初にソ連攻撃の可能性を言いたしたときに同席していた。公表の三日前、海軍軍令部作戦部長フリッケ少将は、はつきり空気を読んで、対ソ戦に関する見解を覚書にまとめた。翌七月二十九日、レーダーはそれを読んだ。フリッケはポリシェヴィズムを「何とかして除去すべき、不変の危険」であるとした上で、海軍の権益が陸軍および空軍のそれよりも下位におかれるというセクシヨナリズム上の不利が生ずることを除いて、ドイツの対ソ攻撃計画に異議はとなえなかった。七月三十一日のヒトラーのソ連攻略という運命の決断に対して海軍は反対せず、戦略的選択肢の提供もなし得なかったのである。

しかし続く数か月間のうちに、状況が変化することとなった。地中海の様子が、六月三十日付でヨードルが覚書で示した「周辺戦争」の事態に適合しはじめたのである。スペイン、イタリア、ヴィシー・フランスを相手とする外交努力がもっと必要とされる場面で、徐々に軍事的代替案が優勢となりはじめた。一方でロシア攻撃の作戦計画が形を整えつつあった。どの選択肢のタイミングについても、頭上にはダモクレスの剣が吊るされていた。

夏の終わりから秋にかけて、海軍の戦略案はヒトラー司令部のものと共通していた。イギリス侵攻計画の見通しが急速に萎えてくると、イギリスの抵抗を抑制するほかの手段が論議を喚び起こした。国防軍の作戦全体を担当するヨードルにとって、自らの提唱する「周辺戦争」こそが最大の関心事だった。それはロシア攻撃と矛盾するものではなかった。むしろ、それは理想的な形でイギリスを交渉のテーブルにつかせてドイツのロシア侵攻の背後を自由にする、または、それがうまくいかないとしても、ソ連に勝利するまでイギリスを拘束状態にしておく。一方、海軍指導部にしてみれば、「周辺（ないし地中海）戦略は、東方の戦いを容易にさせる便法といったものにとどまらず、それこそが戦争の一つの選択肢だったのである。

八月中旬までにヒトラーは、一九四一年の初頭にジブラルタルを獲得し、「それはフランスの意向にかならものと見ていた、同時期にイタリアがスエズ運河に進撃することを掩護する計画を承認していた」。それからしばらくして、八月二十九日にゲルハルト・ヴァーグナー少将(海軍)が提出した、「あしか作戦」の中止にともなうイギリスとの戦争継続に最良の策は何か、という海軍の戦略分析に初めて真剣な検討が加えられた。ヴァーグナーの意見では、補給路を切断することを狙った大西洋の空爆や戦闘ではこれからの数ヶ月、イギリスを屈服させられない。そして翌春までにはイギリスはアメリカの支援を受けて防衛力を向上させざるをえぬ、という結論は、イギリスを攻めるには、イタリアと組んで地中海でその帝国を弱体化させるべし、というものであった。ヴァーグナー少将は国防軍最高司令部の意見を入れ、スペインの援助を受けてジブラルタルを獲得すること、またリビアからエジプトを通過する進撃でスエズ運河を遮断することは可能である、と指摘した。結果、イギリスを追い出して、地中海はまるごと枢軸側のもとなる。そして地中海の航行の自由は北アフリカからの輸入を保證する。その過程でのバルカン地域の枢軸側の勢力はいちじるしく強化される。トルコはもはや中立を維持できなくなり、枢軸衛星国に組み込まれる。アラブ諸国、エジプト、スーダンの原材料は枢軸側が利用可能となる。東アフリカの植民地を攻撃することによって、インド洋の英国の力は大きく阻害され、インドそのものを脅かすことができる。ジブラルタルの喪失は英国にとって大西洋最大の基地が奪われることとなる。アゾレス、マデイラ、カナリア諸島にイギリスが拠点を設けたとしてもジブラルタルの重要性にはとうていおよばない。ドイツの地中海西部での覇権確立は北西アフリカのフランス植民地に圧迫を加え、ド・ゴール主義者、引いてはイギリス側への乗り換えを阻害する。同時に、アフリカ西岸の英国基地は危険に曝されることとなる。

地中海の外、インド洋、大西洋でイタリア海軍はドイツ軍の支援勢力となり、イタリア陸軍と空軍は、とくにアフリカ東岸でイギリスを圧迫する。最終的な利点はスペインの参戦である(ジブラルタル獲得を黙認してくれるとみなされていた)。これはドイツ海軍の戦争遂行能力を大幅に改善するものである。ヴァーグナーの覚書は次のように結論する。

戦争継続にあたって、地中海の覇権確立は決定的な戦略的重要性を持つ。この目的のための作戦は、前述のとおり「暫定行動」を超えるものでなければならぬ。そしてそれは独伊の潜在的戦争能力を強化するのみならず、英本土およびその力の源泉である英帝国全体との最終戦争を戦う基盤を大きく改善する。その世界帝国のもっとも脆弱な部分を攻撃ないし威嚇するので、英国はこれ以上の抵抗を諦めざるを得ない状況に陥るだろう。

アメリカの支援を無視すれば、これは大いにあり得ることだった。だからこそ急がれるのである。これが海軍の考えである、とヴァーグナーは結び、レーダーからヒトラーにつたえることを希望した。九月六日にレーダーが説明を行った四日前、アメリカはイギリスに旧型の駆逐艦五〇隻を提供することに合意した。この決定(第五章で詳しく述べる)はドイツに、英米の連携がそれほど遠くない将来に実現するというシグナルを送った点で、きわめて軍事的に重要な出来事となった。アメリカの介入によって、大西洋のポルトガル領、スペイン領の諸島、および西アフリカのフランス植民地が危険になる、とレーダーがヒトラーに強調したところ、ヒトラーは、英米の上陸の可能性を阻むため、アゾレス、カナリア、ケープ・ヴェルデ諸島占領の準備をするよう指示を發した。(続く数週間、海軍の担当者が兵站分析を行ったが、これらの作戦にはあまり意味がないという結論が出た。)「アメリカ問題」に懸念が拡がりつつある状況を背景に、また「あしか作戦」がお流れになったあと、レーダー

は何とかヒトラーのお墨付きをもらおうべく、「暫定作戦」ではない、事実上ヴァーグナーの覚書の線に沿う「対英主要作戦」としての地中海作戦を強く主張した。レーダーはアメリカが割り込んでこないうちに、ただちに準備を開始するよう望んでいた。ヒトラーは関連の諸命令を出した。しかし、それは地中海作戦を連続攻撃のかわりに行う、という意味ではない。ロシア作戦——当時、「S問題」というコードネームを与えられていた——は、そのあとの命令となった。レーダーはこれに反対しなかったが、海軍にとって絶好のタイミングが失われた、とだけ感じた。念のためレーダーは、ロシア作戦と同時に「あしか作戦」が行われてはならないと付言したが、ヒトラーはただちに了承した。

九月二十六日、レーダーはヒトラーに報告したが、地中海問題には新展開があった。イギリスと自由フランス（シャルル・ド・ゴール支持者）の部隊がその数日前、ダカールを攻撃したのである。ヴィシー派がフランス領赤道アフリカでド・ゴール派の軍門に降ったように、仏領モロッコ、アルジェリア、チュニジアが危険に曝された。ドイツは緊張した。レーダーは単独でヒトラーに面談を申し入れ、きわめて異例だったが「戦争について自分の担当範囲以上の話をした、と言った。かれはヴィシー政府にもっと友好的に接し、イギリスとの戦いに完全な同盟国になってもらいたいと述べた。フランスと統一戦線を組むことで、フランス領を守り、その産物を確保するのみならず、中央アフリカからイギリスを追い出し、西岸の港湾フリータウンを使用不能にさせる、こうすればラテン・アメリカと南アフリカからの物資輸送に甚大な影響をおよぼすことができる、とレーダーは論じた。これはイギリスを地中海から追い払う一つの段取りとなるだろう。北西アフリカに手を出す前でも良いから、アメリカの参戦前にあらゆる手段をもって英国を攻撃すること」にヒトラーが集中するよう要望した。イギリスは地中海を自国の地位保全の鍵と見ている、したがって「地中海問題は、この冬の間片づけておかなければなりません」と、レーダーは結論づけた。ルフトヴァッフェがカナリア諸

島を占領する前にも、ジブラルタルは獲得しておかなければならない。イタリアがスエズ運河を確保することにドイツ軍の援助が必要である。かれはそこからパレスチナとシリアを経由して——それはどうしても必要だがフランス次第である、とヒトラーは言った——トルコに至る進撃を考えていた。「トルコはその段階で、こちら側に入ります。ロシア問題は別の見方ができましよう。ロシアは基本的にドイツを怖れています。北方からのロシア攻撃が必要であるかは疑問です」

それ以上の海軍の具体策となるとレーダーも心もとなかった。海軍軍令部は海軍案に対してヒトラーが同意したことを確定したかった。しかし暗示的なものであったとしても、この提議にあたって、二つの問題が浮上した。

一つは艦隊の規模の問題である。レーダーは、現在の艦隊は、地中海作戦が本格化し、とくにアメリカの参入で戦争が世界の次元で戦われるようになるあまりにも小さすぎる、と述べた。（ヒトラーもこれに同意した。）しかし造船能力は現在の受注をこなすだけで手いっぱいだった。したがって提案された海軍戦略は最初から成り立っていなかったたのである。

もう一つの問題は、ヒトラーが推進している外交政策である。ヒトラーはレーダーに、日本との三国同盟条約締結（たまたまその翌日、九月二十七日に調印が予定されていた）後、ヒトラーはムッソリーニ、フランコと会談を行って、フランスないしスペインと連携するかどうかを決定するつもりである、とつたえた。ヒトラーはフランスの方が望ましいと思っていた。スペインは要求が過大で（仏領モロッコを狙っていた）ありながら出すものは少なかつた。イギリスとアメリカの勢力は北西アフリカから駆逐されなければならない。それははっきりしている。しかしフランスは、アフリカ植民地の自国の勢力範囲について合意が成立する前に、ドイツとイタリアのある程度の領土要求を満足させるべきだった。ヒトラーがその点を強調したわけではなかったが、フランスはその点だけで単純にドイツと

の提攜意欲を失っていた。さらにヒトラーは、レーダーがフランス艦隊をドイツ側に組み込みたいとする希望には冷淡だった。かれは地中海でイタリアのライバルであるフランスを強化することに賛成しないと想われる。ヒトラーは断ることなく動くつもりはなかった。一方、もしスペインが樞軸側で参戦するのであれば、カナリア諸島、それからアゾレスとケーブ・ヴェルデ諸島をドイツ空軍が多分守らなければならない。したがって実際問題としてヒトラーは地中海作戦に青信号を出したとしても、それからまもなくかどうかはヒトラーとムッソリーニ、フランコ、そしてベタンとの交渉次第だった。これら三人を満足させることが容易なものではないことをヒトラーはよく知っていた。それぞれが対立している利害関係を丸くおさめるには「大規模な欺瞞」しか方法はなかつた。それはしかし、ヒトラーとても手に余るものだった。

その九月の終わりに、地中海にドイツの矛先を向けるという海軍のアイディアは、対イギリスで強力な同盟国関係を築きあげようという外務省の「大陸ブロック」案にきわめて近づいていた。外相ゴッヒム・フォン・ラッペントロップ自身は、ソ連と日本を抱き込む強力な世界規模の同盟関係を構築し、脅をならべてイギリスに対峙し、同時にアメリカを中立に閉じ込めるという案に夢中になっていた。この大構想のなかで、ウィシー・フランス、スペイン、イタリアで構成する西側の「大陸ブロック」は小さいが、重要な要素として機能することとなる。一九四〇年八月初頭に検討された、軍事用語で「周辺戦略」と呼ばれたもの。イギリスの輸入を遮断することを別にして——は三つの要素から構成されていた。イタリアとドイツ共同の中東攻撃、ジブラルタルの奪取、アフリカの沿岸と大西洋諸島へのドイツの領有拡大である。九月二十六日のレーダーの説明でも示されたように、こうした軍事作戦の成否は、外交力にも大きく依存していることがはっきりしている。なかでも、スペインとウィシー・フランスの指導者たちからの同意をヒトラーが取り付けられるかどうかは肝心だった。

が、まさにそこで失敗したのである。

4

夏が過ぎて秋に向かうころも、ドイツの中樞近くに位置するものたちは——一時はヒトラー本人もそうだったと思われる——軍事的にどの戦略を選択すべきかがよくわからなかった。さまざまに優先順位を設定することはできた。ということは、まだ選択の余地は充分にあったのである。

ヒトラー自身の優先順位は、イデオロギー上、また軍事判断上、早期のソ連攻撃にあることは明らかだった。それは七月の終わりに決められたことだった。暫定案があったとしても、かれの気持ちが変わったことを意味しない。しかしかれの「周辺戦略」に対する関心は、単なる方策だけのものではなかった。当初、その秋に開始する予定だったロシア作戦は早くとも翌年の春まで延期された。しかし一方で、アメリカの参戦が早まりそうなことに懸念が深まった。明らかにヒトラーは、アメリカ参戦防止に、初夏のころよりも熱意を持っていった。とにかくも、確実な方法はイギリスに戦争をやめさせることである。「あしか作戦」は棚上げになり（名実ともに放棄された）、軍事的、外交的に焦点が絞られてきた地中海には絶対のチャンスがありそうだった。この戦略の諸方策は、これまで見てきたように、国防軍最高司令部作戦部のヨードル（そして次席のヴァーリモンツ）、レーダー、海軍軍令部、そして外相リッペントロップに支持されている。ヒトラーは当面、「周辺」の外交努力に集中し、その成功にしたがって軍事作戦を練るという方向を打ち出した。しかし、レーダー、ヴァーリモンツ（ヨードルは賛成していなかったとしても）、そしてリッペントロップすらも「周辺戦略」をロシア攻撃の代替物と見ていたことに対し、ヒトラーはそれをソ連と対決する前にドイツの背後を固

める前奏曲と見ていただけだった。かれにとって、ソ連との対決は避けられず、またそれだけが戦争の最終的な成否を決するものだった。したがって、ヒトラーの本心はいささか「周辺戦略」にはなく、それ自身が目的ではなかった。十月にかれはムッソリーニ、フランコ、ベタンと協議する旅に出たが、その外交努力がまったく実を結ばなかったことは、ある意味でそのことを説明しているのかもしれない。ヒトラーも幻想を抱かずにかれらと会っていた。

十月四日、ブレンナーでムッソリーニと会ったヒトラーの主な目的は（かれはなかなか要点に入らなかったのだが）、フランスとスペインを「共通のライオン」に立たせ、「対英大陸連合」を組むことができるかどうかを打診することだった。ムッソリーニに異議はなかった。しかし、独裁者二人にはつきりしていたことは、スペインが参戦の代償に領土要求——モロッコとオランをフランスから、そしてジブラルタルをイギリスからもらう、後者は問題ないだろうが——をしてくるだろうが、これはフランスが了承するまい、そしてそれはド・ゴール派が北アフリカの要地に侵入することに道を拓く（すなわちイギリスの影響力の浸透こと）につながる、という点だった。一方、ムッソリーニはヒトラーに、この機会を利用して、イタリアがフランスに領土上の譲歩を要求すると念を押した。イタリア、フランス、スペインという地中海の三大国がいずれも満足する外交上の解決策を見つける可能性はきわめて困難だった。ヒトラーには枢軸仲間との関係を損なうことはできなかった。それゆえに、話し合いは友好的ではあったが、「大陸連合」の創設に寄与する成果をあげられずに終わった。

十月二十三日、アンダイユで行われたフランコとの会談では初めから得るものは何もなかった。ヒトラーには交渉材料が乏しかった。ヒトラーはジブラルタル攻撃と、イベリア半島沖合いの大西洋に点在する諸島の防衛のためにスペインの参戦を希望していた。しかしスペインが要求すると予想される莫大な代価を支払うつもりはなかった。膨大な武器弾薬と食糧、そのほかジブラルタル（これは譲

歩するつもりだった）のみならず、モロッコとオランに対する領土要求。ヒトラーの考えは外務次官エルンスト・フォン・ヴァイツェッカーが日記に記しているものと同じだったようだ——「そういう形でのジブラルタル移譲はやりすぎである」。フランコの物資援助の要請にもドイツは応えるつもりがなかった。領土要求も、ムッソリーニに明確につたえたように、ヴィシー・フランスを弱体化し、北アフリカの枢軸側の抑止力を損ねることで問題外の話だった。したがって、ヒトラーはジブラルタルのほかはまったくフランコに提示しなかった。フランコは、スペイン人にとってジブラルタルの獲得は望ましくはあるが、リスクが高すぎるし、ヒトラーの身構えは別として、枢軸が本当に勝てるのか疑っていた。ヒトラーは手ぶらで戻った。

翌日のベタンとの話し合いはより友好的だったが、まったく良いところはなかった。仏独間の「協力」協定は、対英戦争にフランスの直接参戦を促すことにはほど遠かった。論議は一般論に終始した。またもやヒトラーの手は縛られており、具体的な提案は何もできなかった。ドイツ側に立つ（またドイツの条件に基づく）ヴィシー・フランスの参戦は、ドイツの軍事戦略に組み込まれることを意味するが、平和条約で北アフリカを掠めとったり、フランス本国沿岸のブリーやカレー、またドイツの狙いであるアルザス・ロレーヌの奪取などを盛り込むようであれば、ドイツの提案が魅力あるものになることは難しい。さらにヒトラーにとって重要だったのは、フランスと親密になりすぎるとイタリアが間違いなく怒りだす、それは何としても避けたいところだった。いずれにせよ、ヒトラーが同盟国としてのフランスを心底望んでいたのか疑わしいところがある。ベタンとの会話もシャドウ・ボクシング以上のもではなかった。

要は、ヒトラーはフランスを敵に回すことなしにスペインを満足させられなかったし、「友人」のムッソリーニと不和にならずにフランスと調和を図ることはできなかったのである。十月二十八日、

ワシントンでもう一度ヒトラーとムッソリーニが会談したとき、友人が不調に終わることになるギリシア侵攻作戦を始めたためにヒトラーは怒り狂った。それは地中海における独伊の軍事連携が、ヒトラーを途方もなく邪魔するものだった。

ヒトラーはすでにワシントンとハタンとの会談を終えた段階で、従順な国防軍最高司令部長官のヴァルヘム・カイテル陸軍元帥とヨードルに、翌年ロシアに侵攻する必要がある旨を告げていた。ヒトラーはそのすぐあとの十一月四日、地中海と中東に焦点を当てたあらゆる戦略可能性について、自身の情勢展望を説明しながらも、ロシアはヨーロッパの最大の問題であり続け、すべては一大決戦に備えられなければならない」と軍幹部に述べた。イギリスを相手とする西欧の限られた大陸ヨーロッパから組めなかったことは、最終勝利はソ連を迅速に打ち破ることによってのみ獲得し得る、というヒトラーの初心を明らかに固めさせるものとなった。ジブラルタル（およびカナリア諸島とケープ・ヴェルデ諸島）の占領は、まだヒトラーの行程表の上位に載っており、かれはフランコの参戦に望みをかけていた。アヴレス（ポルトガル領）の攻略も必要となり、それにリスボンが異議を申し立てるのであればホルトガルに出兵することも辞さない、とヒトラーは言った。しかし、ムッソリーニのギリシアでの無謀な試みは、イタリアのリビア攻撃を遅らせ、結果としてドイツ軍の北アフリカの展開とスエズへの進撃も遅らせることとなった。これは同盟国イタリアの軍事能力に対するヒトラーの不信の最初の兆候となった。

ソ連の外務人民委員ヴァチエスラフ・モロトフが、十一月十二日から十三日にかけて、ヒトラーとの会談のためベルリンを訪問したときも、ドイツの軍事戦略は判然としない未定の状態にあった。モロトフとの協議が始まった当日、ヒトラーは戦場となる可能性のある幅広い地域について指令を発した。イギリスを地中海西部から駆逐し、イベリア半島ないし大西洋島部に橋頭堡を許さないジブラルタルの獲得はその目玉だった。スペインを何とか戦争に引き込もうとする努力は継続中だった。当面、対英戦にフランスの完全な協力を求めることは難しかった。イタリアのエジプト攻撃にドイツ軍を援軍とすることは見送られた。英国侵攻の「あしか作戦」は公式には放棄されていなかったが、軍事的優先順位の外にあった。ムッソリーニのおかげで、エーゲ海北方のギリシア占領の準備をする必要があった。しかし最重要の項目が指令の最後に記載されていた。「近い将来におけるロシアの地位を明らかにするための政治的論議が進行中である。その論議の結論がどうあろうと、すでに口頭で命じてある東方への準備作業はすべて継続されなければならない」。この点について、とくに軍事作戦に言及されてはいなかったが、ヒトラーが地中海作戦には懐疑的であって、かれがその夏、すでに中心においたソ連侵攻に戻っていることが指令では示されていた。モロトフ訪問による不快感がその決定打となることとなった。

したがって十一月二十四日、レーダーが地中海作戦とスエズ侵攻作戦の優先を、ヒトラーに新たに懇請したときは、馬の耳に念仏であった。ヒトラーはロシアとの対決を目指している、と単に答えただけだった。ロシア作戦はイギリスに勝つまで待つてほしいというレーダーの要望は柳に風と受け流された。レーダーがイギリスないしアメリカによるポルトガル領の大西洋諸島を占領する可能性に注意を促すと、ヒトラーは特有の理屈で答えた。かれはまずアヴレスを防衛拠点とは考えていないと言った。自分はそれを攻撃的拠点と考えている、と。そこはアメリカを航続距離内に置く爆撃機の基地となる。そのためアメリカはイギリスを援助することよりも自国の防衛を優先する。このことはヒトラーの頭のなかで、いまやイベリア半島とスペインおよびポルトガル領大西洋諸島が、英米の干渉の抑制剤となっていたことの証である。その間に自らは、当初——夏の初めころ——イギリスを交渉テーブルに就かせる戦略の一部と考えていたことと違った形で東方作戦に没頭するつもりだった。

そのすぐあと、ヒトラーは野戦本営を開設するために副官を東プロイセンに派遣した。十二月五日、ヒトラーはワウゼーチンとハルグラーに、翌年五月初頭にロシア攻撃を開始するための軍の編成準備を命じた。三日後、かれはスハインに対する修正提案が失敗した報告を受けた。フランコは頑なにスハインの参戦を拒否した。ただちにヒトラーは「政治的条件が整っていない」理由により、ジブラルタル獲得策を撤回した。ヒトラーにはまだいささかの未練があったが、一月九日、この作戦は放棄された。そのかなり前、十二月十八日付けでドイツの東方を指向する戦略が確定した。バルバロッサ作戦が正式に発令された。それは目的をはっきりさせていた。イギリスに対する勝利以前にあって、迅速な作戦でワウゼーチンとロシアを打倒する。というものだった。基本的に七月三十一日に執られたこの決断は、ここで軍命令となった。もう引き返すことはできない。夏の終わりから秋にかけて短期的に提示されたそのほかの選択肢はいまや決定的に廃棄されたのである。

5

一九四一年に運命の選択をしたヒトラーは、勝利につながる、ないし少なくともその後の敗北を避ける別の道を選ばなかったという意味で、チャンス逃すというミスをしたのだろうか？

この問題はこれまで見てきたように、色々の観点から論じることができよう。まずもっとも重要な要素はヒトラー自身の固有の考え方である。結局、かれがすべてを決した。ほかのものたちはかれに影響を与えようとした。しかし最終的にはかれが決めたのである。ヒトラーは間違いなくチャンス逃したとは思っていない。一九四一年の晩夏から秋にかけて、もろもろの可能性が検討されていたが、そのどれもが、ヒトラーがすでに七月に最善策として決めていたソ連攻撃に優るといこと

を証明できなかった。ソ連攻撃は冬の到来前に素早く勝ちをおさめて英米との一大闘争に備えるものである。これはもちろん、ヒトラーの長年にわたり不変だった思想的信念に合致しているが、そのタイミングは戦略判断に基づいている。

ヒトラーはアメリカの参戦を一九四二年と見ていた。したがって、時はドイツに味方しない、アメリカとの戦いが始まる前、一九四一年中にヨーロッパの戦争を終わらせ、ドイツが負けない態勢を作っておかなければならない、とヒトラーは考えていた。一九四一年春のロシア侵入開始を取り止めることはおろか、延期することもヒトラーが考えていた兆候はない。一九四〇年七月の終わりに開始された準備作業は停止されることがなかった。イギリスを封じ込め、アメリカの動きを妨げる「周辺戦略」は、ソ連攻撃の代替策ではなく補強策だった。地中海とイベリア半島問題に軍事、外交努力を傾けることをヒトラーが真剣に考えていたことは間違いない。しかし、それら地域の三大国、イタリア、フランス、スペインの深刻な利益の調整ないし克服が戦争中にできる見通しはまったくなかった。必要となる政治的枠組みの目途が立たない以上、地中海の軍事作戦が果実を生むことはなさそうだった。

スペインが参加しなければ、地中海西方作戦の鍵となるジブラルタル攻撃は別の意味を持つ。それは成功するだろう。しかし軍事的にも政治的にもその代償は大きすぎるだろう。

フランコがスペインは中立を守るといふ方針を打ち出したために、計画が中止されたことは間違いない。もう一つの地中海の軍事作戦の柱、スエズ進撃はイタリア軍を当てにしていたが、すぐにイタリア軍は連携の輪のもっとも弱い部分であることを露呈した。ムッソリーニがギリシアに侵攻したとき——ヒトラーは、驚くにはあたらないが、ただちにこれを愚劣な行動と決めつけた——北アフリカでのイタリアの成功の見通しは消え失せた。弱く、またリビアで戦線が延びきっているイタリア軍はスエズ進撃に使うようもない。またフランス軍とも共同作戦の余地はなかった。一九四〇年の暮にか

けて、イタリヤのギリシア侵攻が苦境に陥ったため、ムッソリーニは独仏の協定締結を歓迎したが、地中海と北アフリカでフランスの力が高まることは嫌った。

こういった諸事情でヒトラーは自らの戦略の代替案を考える必要はなかった。かれが狙おうとしたもの、自らの戦略の補強策は実現しなかった。それゆえ、かれの眼からみればチャンスを選したことはならないのである。

戦略の中根に参画したものはどうか？ やはりチャンスを選したと思っただのだろうか？ はっきりとした別の選択肢は、これまで見てきたように海軍が計画し、レーダー元帥が一度ならずヒトラーに持ち込んできた。レーダーは、説得力豊かにというわけではなかったにせよ、ヒトラーにロシア攻撃を思いとどまらせようとした。ヒトラーはレーダーの地中海作戦に賛成すらしした（東方作戦の代わりというわけではなく）。しかしその秋、とくにモロトフの訪問を受けて、かれは再度方向転換をした。モロトフと話してみて、今さらながらロシアがドイツに立ち向かう脅威であることが歴然としてきたのである。レーダーは事態の推移を見て自らの計画をヒトラーに説得するのは無理と判断した。ヒトラーは電撃戦かソ連に対する唯一の勝利の道であるという確信を曲げることはなかった。そしてレーダーは半信半疑ではあったもののロシア侵攻に反対はしなかった。海軍の地中海作戦の形が整ったときには、フランス敗北のあと、大植民帝国を建設する楽園の夢に一時的にふけたものの、そこからは醒めていた。ソ連でに政治的、軍事的にそれを実現する目途は立たなくなっていた。ヒトラーのロシア攻撃の理屈には勝てなかったのである。

国防軍最高司令部で地中海作戦をもっとも熱心に主張したのは、作戦部のヨードルの補佐官、ヴァーリモント将軍である。しかし秋が深まると、北アフリカ打通作戦に焦点を当てるかれの提案は影が薄くなってきた。ヴァーリモントは直属の上司で、ヒトラーに密着している軍事相談役のヨードルの支

持も得られなくなってきた。六月の終わり頃には、ヨードル自身が「周辺戦略」を、ヒトラーの狙うロシア攻撃の助けになるものとして前に進めようとしていたことは前述のとおりである。一九四〇年十二月以前、ヨードルは東方の戦争準備の詳細な部分にはほとんど関与していなかった。それは陸軍総司令部の仕事で、国防軍最高司令部作戦部のすることではなかった。それでもヨードルはソ連攻撃というヒトラーの決意に疑問を投げたりはしなかった。対仏勝利で誇張された、批判を許さぬヒトラー軍事天才説があり得べき軍内部の反対論を封じ込め、カイトルのようなおべっか遣いが横行した。当初のブラウヒッチュやハルダーのような陸軍（ロシア攻撃が開始さればまさに鍵を握ることになる国防軍のかなめ）幹部の疑念がどうあろうと、それはもう消え失せてしまった。二人ともただちに東方の戦争最優先の準備にとりかかった。ハルダーが七月十三日付けで記録しているように、かれらもヒトラーと同じく、イギリスが和平に応じないのはロシアを頼りにしているからだと見ていた。ほかの選択肢についての真剣な考察が加えられることはなかった。空軍から何か提案されることも期待できなかった。空軍の幹部は陸軍よりもはるかにナチ寄りで、その最高司令官は、何よりもヒトラーの寵愛を失うことを恐れるゲーリングだった。何にもまして、これが空軍の東方作戦支持の理由だった。

組織上の軍内部の分裂状態も、ヒトラー個人の計画に代わる真摯な選択肢の提出を阻んだ。これまで触れてきたように、陸、海、空軍の参謀総長、そして国防軍最高司令部作戦部長（戦略計画全体に責任を持つ）が一堂に会して戦略を練るといふ機関はなかった。また実質的討議が不可能なヒトラーが仕切る会議以外に、司令官たちが集う会議はなかった。ヴァーリモントの部署と海軍司令部の間で短期間、見解を共有する連携関係が芽生えたが、双方とも軍内部で支援者は不在⁽¹⁾かつヒトラーの反対を覚悟の上で選択肢について議論の相手となってくれるものはいなかった。したがって構造的に、

筋の通った代替戦略を樹立することは無理だったのである。考察に値する方法論がそもそもなかった。代替策が存在しなかつたのであれば、チャンスを選んだという議論そのものが成り立たなくなるのである。

しかし、ヒトラーがほかのチャンスを受け付けず、軍部も選択肢を強制できなかったとすれば、ドイツに勝利をもたらす、ないし少なくとも大災厄につながらなかった理論上のチャンスはあったのだろうか？そしてそれに上層部が気がつかなかつただけだったと？これはもちろん歴史の議論に任せるべきだろう。実際に起こったこととそのときの現実の戦略。そして歴史のもしもについての仮説、考慮すべきさまざまな可変数を考えれば、問題は学問的な推理ゲーム以上のものではないだろう。しかし当時の状況を踏まえた思考実験をすれば、ドイツ、イタリア、スペインに強硬策を要請し、フランス軍を参戦同盟国軍として加えて。地中海、北アフリカで本格的な戦いに入ることも想像できる。これは東方への攻撃準備を犠牲にするものではあるが、少なくとも短期、中期的には充分引き合うものとなり、その後の展開の様相を大いに変化させ、ドイツを襲った大災厄を回避させた可能性はあった。

地中海の喪失が、英帝国の覇権全体にとって、レーダーの意見のように致命的だったわけではないことは認めなければならぬ。しかし地中海地域のコントロールを失い、領有地と中東の原油が奪われれば甚大な打撃を受ける。イギリスとその帝国は間違いなく弱体化し、中東とインドの独立運動が高まるのが目に見えている。イギリスの軍事的威信はいちじるしく傷つくだろう。そしてここ数年、国内の孤立主義者と戦ってきたルーズヴェルトが、脆弱なイギリスの支援に動くことは考えられなくなってくる。極東では日本が英国の挫折につけこんでくるに違いない。そうすると、大西洋に野心を払っていたアメリカが、歴史に見られるよりも早い段階で太平洋に目を向ける可能性もあった。

この暗いシナリオで、イギリスが持ちこたえられたか、またはチャーチル内閣が倒壊して和平交渉に入ったかどうか、論議は分かれるところである。イギリスをしたがえ、大陸と北アフリカでドイツが覇権を確立し、アメリカが日本で手一杯となると、「ロシア問題」にはまた別の光があつたことだろう。一九四一年にソ連を打倒するという戦略は、より緊急性を欠き、より必要ではなくなる。ポリシェヴィズムへの嫌悪は残るだろう。しかしスターリン体制はそれほどの脅威ではなくなり、封じ込め易くなる。ロシアに対して電撃戦を仕かけるリスクを冒さなくて済む。軍の指導者たちとしてはヒトラー独特の考えを弱め得たということとなる。

しかし、地中海作戦が徹底的に行われたとしても、どこかの時点でヒトラーは大陸の戦争を起こしただろう。あり得ることはそれほど遅い時点ではなく、ドイツが帝国主義的な圧制に走つただろうということである。その場合でも、長期的に見ればアメリカの資源には対抗できなかっただろう。状況が有利と見れば、ソ連は連合国側に加わつただろう。ドイツはいずれにせよ二正面戦争の脅威に曝される。核兵器の開発競争が始まったことだろう。そしてアメリカの科学者（そのなかにはドイツの亡命者がいる）が、実際に起こつたようにこれに勝利する。想像できる結果は、ヒロシマとナガサキではなく、ベルリンとミュンヘンに原爆が落ちることとなる。

現実世界のヒトラーは、幻想や想像の世界とは異なり、一九四〇年にミスを買ったわけではなかった。ドイツの指揮命令系統に鑑み、また一九四〇年の夏から秋にかけて、最初にドイツが直面した戦略上のジレンマのことを考えれば、ソ連攻撃が唯一の実際の選択肢であった。それはヒトラーの決断だった。それを咎めたとして意味はなく、戦後の色々な弁明も手遅れである。それはヒトラーを離れて、広範な影響を及ぼした。軍のエリートたちは、ほかの分野の支配層や国民の信任を得て、ドイツを世界的な大国にしようとする指導者のキャンブルを支持していた。しかし、この賭けは、長期的に

はどんどんドイツの不利になっていくもので、免責条項などなかったのだ。一九四〇年、ヒトラーとその体制は戦いを終わらせる目途が立たず、いつものように大胆な賭けに打って出た。今度は「雨あられのように」ロシアに進撃するというものだった。世界は「固唾をのんだ」。それは狂気だった、しかし筋道はあったのである。

第2章

東京、一九四〇年夏、秋 日本「絶好の機会」を捉えることを決断

絶好の機会を捉えよ！ 何ごとも邪魔されるな！

一九四〇年六月二十五日、陸軍大臣、畑俊六

史上最大の好機いたれり。いっそうの国威発揚を図るべくただちに準備を要す。

……眼前のこの好機逸すべからず。

一九四〇年七月四日、陸軍からの声明

極東では別の戦争が進行中だった。それは欧州の戦争の二年以上前の一九三七年七月に始まっていた。中国人は、一九三九年秋ドイツ軍に征服されたポーランド人が被ったと同じような、日本軍の非人道的行為に曝されていた。日本が終始「支那事变」と呼んだこの中国との戦争は、ドイツが一九三九年九月一日にポーランドに攻め込むことで始めた戦争とはまったく切り離されていた。しかし、ヨーロッパ「列強」と米国が中国に保有している権益の存在で、この戦いは最初から国際性を持つものだった。一九四〇年の春、ドイツ軍の西方への攻撃が低地諸国とフランスを席捲し、イギリスをあわや降参させようとしたころも、日中の戦いの終わりはまったく見えていなかった。西欧諸国に対するヒトラーの圧倒的な勝利は、前者の国々は弱く見えた日本が、東南アジア（イギリス、フランス、オランダが広大な植民地を保有する）へ進出すること、そして枢軸大国のドイツ、イタリアとの同盟関係を強化するという運命の決断を行ったことの引き金となった。決定的となったこの期間、日